

小池氏は半世紀近く前から「カイロ大学卒業の才女」をウリに生活の糧を得てきた。政界で重用されているのも、その肩書があったからだ。一時は「首席卒業」とまで言い、著書にも明記していたが、疑いを指摘されて「勘違いだった」と修正している。

だが、「カイロ大学卒業」自体は、訂正されないまま今日に至る。「卒業」に対する疑義は過去にも繰り返して指摘された。そのたびに、小池氏は言葉巧みにかわし、追及者を煙に巻いてきた。

## 豊富な物証

今回、再燃したのは、ノンフィクション作家、石井妙子氏の『女帝 小池百合子』（文藝春秋、5月刊）がきっかけだった。初版7万部がすぐ売り切れ、発売から約2週間で15万部を超え

る勢いだという。最近のノンフィクション作品としては、驚異的な売上げだ。

石井氏は、この著書で「学歴詐称」の決定的な証拠を提示している。エジプト留学時代に小池氏と同居していた女性の証言と、その証言を裏付ける当時の膨大な量の手紙や手帳、メモなどの「物証」である。

同居女性の証言によると、まず小池氏はカイロ大学には正規に入学していない。連日誘いにくる商社の男性たちとゴルフやテニスに興じる小池氏を心配に思った同居女性が遠回しに「勉強しないで平気なの？」と尋ねると、「いいの。だってお父さんが、ドクター！ハ

ーテムにカイロ大学に入れるように頼んでくれているから。それを待ってあげればいいの」と答えたという。そして事実、小池氏はその有力者の口利きで1973年10月にカイロ大学の2年生への編入をはたしたという。

カイロ大学は入学できても進級試験が厳しく、留年しない卒業するのは至難の業だといわれている。勉

強もせず、初級レベルのアラビア語もおぼつかない小池氏は、授業についていくことができずに「落第」した。卒業どころか、最終学年にも進級できなかった。同居の女性は、小池氏が落ち込みふさぎ込んでいるようすを鮮明に覚えていた。

にもかかわらず小池氏は、日本の新聞の取材に「カイロ大学卒、初の日本人女性」と売り込んだ。記事を目にした同居女性が驚いて「百合子さん、そういうことにしちゃったの？」と聞くと、小池氏は悪びれるようすもなく「うん」と目を輝かせた。そして、別れ際に日本に帰ったら本を書くけど、その女性のことは書かないと告げる。「ごめんね。だって、バレちゃうからね。女性が黙っている

と、小池氏は身を寄せて、下からのぞき込むようにしながら、「いい？」と畳みかけたという。

この女性の証言が強いのは、単なる記憶ではないことだ。小池氏とのやり取りや、その時々を思いをメモに記し、母親への手紙にも書いている。石井氏はそれ

らをすべて譲り受け、仔細に分析しながら著書にしている。真实性は相当に高い。

知事と対立する都議会自民党などは、この「女帝 小池百合子」の発売を受けて、カイロ大学の卒業証明書書を議会に提出しよう小池氏に求める決議案を提出したが、6月10日の本会議直前に取り下げた。在日エジプト大使館がその前日にフェイスブックで小池氏の卒業を認めるカイロ大学の声明を公表したからだ。

カイロ大学は声明で、卒業証書に疑問を呈することはカイロ大学およびその卒業生への名誉毀損であり看過できないとして、「我々がかかる言動を精査し、エジプトの法令に則り、適切な対応策を講じる」とまで述べている。

## カイロ大学の声明

都議会自民党はこの警告に怯んだが、いくら著名な政治家とはいえ一留学生のことについて大学が、しかも政府（大使館）を通じて声明を出すというのは、尋常ではない。そう思ってい

たら、ネットメディアの「ロイター」がカイロ大学OB（95年中退）で「カイロ大学」闘争と平和の混沌（カオス）（ベスト新書）の著書もあるジャーナリストの浅川芳裕氏のインタビューを掲載し、その謎解きをしてくれた。

一言でいうと、あのカイロ大学の声明は「エジプト軍閥が切った外交カード」だというのである。カイロ大学は50年代のナセル革命以降、軍部とくに情報部の支配下にある。小池氏をコネで入学させ、後ろ盾になつてきたハーテム氏はエジプト情報省を創設し、長年、軍事独裁政権を支えてきた。軍情報部はめぼしを付けた外国人をカイロ大学に入学させ、エジプトの国策に都合のいいエージェンツに育ててきた。小池氏はその一人だという。

浅川氏はインタビューの最後にこう述べている。

（エジプトの軍部・情報部に借りがあり、弱みを持たれた日本人が現職の東京都知事、そして「日本初の女性首相」候補だったとしたら……）

2016年の民放テレビ

東京都の小池百合子知事（67歳）が6月12日ようやく記者会見を開き、18日告示、7月5日投開票の都知事選に出馬することを表明した。発表がギリギリになった背景には、数年来くすぶり続けてきた「学歴詐称疑惑」があると見られる。